

霊宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第98号

平成23年4月8日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

(財)高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話0736-56-2029

URL <http://www.reihokan.or.jp>

高野山霊宝館紫雲殿内部完成予想図



高野山霊宝館は今春
開館90周年を迎えます
5月15日(日)の開館記念日は
拝観無料 &
ご来館の方全員に
特製記念品プレゼント!

利用案内

開館時間

11月1日～4月30日

8時30分～17時00分

5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

休館日 年末年始のみ

■ 拝観料 大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

■ 専用駐車場あり

東日本大震災で被災
された全ての方々に
心よりお見舞い
申し上げます

第98号 目次

開館90周年記念企画展のお知らせ

2～3

高野山霊宝館の弘法大師絵像を詠んだ
短歌について

4～5

収蔵品の紹介72

6

高野山の古建築 第二回

7

高野山金剛峯寺の発生と修験道

8～9

新連載エッセイ 高野山の光と影

10

神は細部に宿る 第五章

11

霊宝館の庭園

12

開館90周年記念企画展

宝を護れ!

大正時代の保存プロジェクト

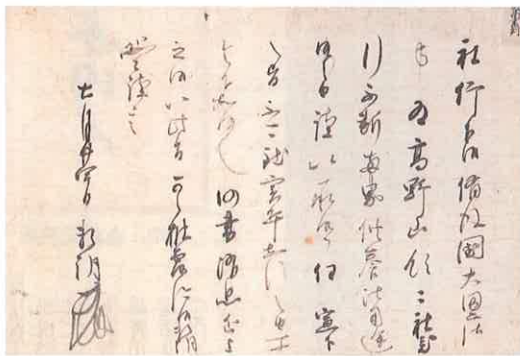
期間 4月29日(金・祝)～7月10日(日)



国宝 澤千鳥螺鈿時絵小唐櫃 金剛峯寺



国宝 八大童子立像の内 清浄比丘立像 金剛峯寺



国宝 宝簡集 源頼朝書状 金剛峯寺

主な出陳品

一二〇〇年の歴史を誇る高野山。そこに伝えられた宝物を護る使命を担い、大正十年(一九二二)に霊宝館は開館しました。明治四十三年(一九一〇)の設立事業開始後、大正という激動の時代にあつて、そこには大きな壁、大きな苦難が待ち受けていました。やがて、三十三人の男達が立ち上がります。高野山の宝を護れと、男達と僧侶の命を賭した苦難の道のり。霊宝館設立の物語を紐解きます。開館当時に出現された宝物もご紹介します。

開館当時出陳された宝物

国宝 八大童子立像の内 清浄比丘立像 金剛峯寺

国宝 澤千鳥螺鈿時絵小唐櫃 金剛峯寺

国宝 紺紙金銀字一切経 金剛峯寺

国宝 宝簡集 源頼朝書状 金剛峯寺

国宝 宝簡集 北条時政書状 金剛峯寺

国宝 宝簡集 北畠親房蓮華乘院勸学科所寄進状 金剛峯寺

国宝 宝簡集 長慶院御願文 金剛峯寺

重文 不動明王立像(帆不動) 蓮上院

重文 紺紙金字一切経(荒川経) 金剛峯寺

紫雲殿の由来と紫雲の美術

国宝 阿弥陀聖衆来迎図 有志八幡講十八箇院 (4月29日～5月22日)

未指定 阿弥陀二十五菩薩来迎図 金剛峯寺

未指定 阿弥陀三尊来迎図 金剛峯寺

崔子玉座右銘と狩野探幽・大師会

重文 崔子玉座右銘断簡 宝亀院

未指定 釈迦三尊像(狩野探幽筆) 宝寿院 (5月13日～6月19日 この期間以外は複製を展示)

富岡鉄斎と高野山

未指定 山水図(餐水喫霞図) 富岡鉄斎筆 霊宝館

未指定 南山宝刹図 富岡鉄斎筆 霊宝館

未指定 撥雲尋道図 富岡鉄斎筆 霊宝館

ほか多数展示



阿弥陀二十五菩薩来迎図 金剛峯寺

特別公開 国宝・阿弥陀聖衆来迎図
有志八幡講十八箇院
 4月29日(金・祝)～5月22日(日)

霊宝館本館の中心は「紫雲殿」と呼ばれています。有志八幡講十八箇院蔵「阿弥陀聖衆来迎図」を展観するための空間として、阿弥陀如来がこの世に来迎する際に乗るといわれる「紫雲」から命名されました。開館90周年を記念して、「阿弥陀聖衆来迎図」を展示し、紫雲殿本来の姿を再現します。

5月15日(日)の開館記念日〈拝観無料〉にご来館の方、土曜講座・ミュージアムトークにご参加の方、会期中館内設置のクイズにお答えいただいた方に、開館90周年特製記念品(下記3点セット)をプレゼント! ※なくなり次第終了



特製リーフレット



特製クリアファイル



特製絵はがき4枚

記念講演会

「高野山奥之院文学散歩」

講師 静慈圓(当館館長)

5月15日(日) 午後2時～3時

会場 当館迎賓館

聴講無料。定員40名。

電話予約可。

開館90周年記念法要

5月15日(日) 午前10時開始

会場 当館紫雲殿

事前申し込み不要。

お気軽にご参列ください。

ミュージアムトーク

当館学芸員による展示解説

5月18日(水)〔国際博物館の日記念〕

6月25日(土)

いずれも午後2時～3時。聴講無料。

事前申し込み不要。

土曜講座「宝を護れ!〜大正時代の保存プロジェクト〜」

当館学芸員による展覧会講座

5月14日(土) 午後2時～3時

会場 当館迎賓館

聴講無料。定員40名。電話予約可。

お問合せ・お申込み

高野山霊宝館 電話 0736-56-2029

高野山霊宝館の 弘法大師絵像を 詠んだ短歌について

高野山高等学校教諭 山本 七重

高野山霊宝館は大正十年五月十五日に開館し（この経緯については『霊宝館だより』第九十六号に詳しく書かれています）、それから九十年の長きに亘って高野山の宝物の保存活動や展示公開を行い、多くの人々に貴重な文化財に触れる機会を提供してきましたが、見学に訪れた人々の中には文化人や有名人も存在しています。

その中の一人に近代を代表する歌人で、書家、美術史家でもある会津八一やいちがおり、『山光集』さんこうしゅう（昭和十九年発行）という歌集の中に霊宝館に所蔵されている弘法大師絵像を詠んだ短歌があるのでご紹介させていただきます。

その朝金剛峰寺の霊宝館にて大師の絵像に対して

しづけさのはなにあるごとこんど
うの五こたにぎりておはしますかも
すがしくもはなやぎてこそおはし
けれにつたうしやもんへんぜうこん
がう

右の歌は、昭和十八年十一月十九日に詠まれたものです。会津八一は早稲田大学で東洋美術の講義を受け持っており、その研究のために何度か奈良の諸寺院を訪れています。この時も学生とともに奈良や当麻寺で仏教美術の研究・鑑賞を行ったあと、前日の十八日に高野山に登り一泊しています。



参考図版：弘法大師像（部分） 金剛峯寺
昭和18年頃の霊宝館の展示記録は残っておらず、八一が見たものがどれであったかは、残念ながら特定できません。

ここには引用していませんが詞書の「その朝……」の前には、会津八一が宿坊で目覚めると白一色の荘厳な雪の世界が広がっていたことや、八一の年齢が弘法大師空海の入定の年齢を一歳越えていることに対する感慨などが書かれています。

そうした思いを抱きながら作者が霊宝館を訪れると大師の尊像が掲げられており、八一は右記の二首を詠んだのです。

大意をとると、一首目の歌は「静かななかにもうるわしいお姿だ。まるで花でも持つように（煩惱を砕くといわれる）金銅で作られた五銖（ごしゆ）にぎられておられることよ」という

は「清しいなかにも華やぎておられることよ。（さすがは万難を排して密教を持ち帰られた）入唐沙門の遍照金剛様であることだ」という感動を詠んだものです。

表現は平易ですが、仏教美術に心酔し、奈良の仏像や寺院を何度も訪れている八一の目から見た大師の絵像を通してうかがわれる大師の尊さや、大師の生涯に思いを馳せた歌になっっています。

なお、八一が高野山を訪れた昭和十八年は戦争の真っ最中であり、普段の生活でも物資の乏しいなかで、学生とともに苦勞の多い研究旅行だったと思われます。そのような中で、特にこの学生達



会津八一近影
(昭和18年1月23日、撮影・三浦寅吉) ※



『山光集』
(昭和19年9月、養徳社) ※

※新潮社『新潮日本文学アルバム61
会津八一』から許可を得て転載

との奈良、当麻寺、高野山などへの研究旅行は、戦争が激化するなかで迫り来る学徒出陣への送別の意味をこめた旅行だったようで、この年から戦死者が増えるに伴い兵員不足のため学徒動員が本格化したようです。

高野山でもこの当時、戦争の嵐が吹き荒れており、奇しくも八一が霊宝館を訪れた翌日の二十日に、高野山大学でも学徒出陣のための第一回目の仮卒業式が行われました。『高野山大学百年史』には、この学徒出陣の仮卒業式の様子について、金山学長が祖廟参拜の後帰校し、勅語奉読の後式辞を述べ、その後、相羽俊長学生が出陣学徒の代表として「征きて醜のみ盾たらん」とその決意を述べて終わった。と書かれています。

この時、高野山大学から学徒出陣していった学生は二十二名と記録されています。このことから、当時、美術研究のための旅行がいかにか大変なものであったかが想像されます。そのような中で、八一や学生達は高野山を訪れ、霊宝館の宝物を鑑賞したのです。

八一も学生達も、この旅行で霊宝館の大師絵像や文化財を鑑賞したことでどれだけ心が癒されたことでしょうか。戦争中もすぐれた文化財を人々に公開し続けた霊宝館の存在を、私たちは心にとっかりと銘記しておくべきだと思います。

なお、八一にはこの頃に戦争を詠んだ短歌もありますが、それはみな悲壮な作品が多いように感じます。一例をあげると、南太平洋クエゼリン島の日本兵の玉砕を知って詠んだ「わたつみのそこひもしらずゆくしほのふかきうらみをわがいかにせむ」(大意「海の深い底を行く潮の

ように、深い恨みを私はどのようにしたらよいのだろうか) などです。一般の歌人達が時局に迎合して勇ましい軍歌調の歌を歌っているのとは明らかに一線を画しています。そのような意味で、戦争の激しいさなかに、仏教美術鑑賞の旅にでたことは、八一流の戦争に対するささやかな抗議であるとともに、学徒出陣していく学生達に仏像の尊さや芸術のすばらしさを伝え、その仏たちに学生の無事を祈るための旅だったのではないかと思われれます。

会津八一(一八八一〜一九五六)
美術史学者・歌人・書家。新潟生まれ。号は秋、艸道人・渾斎。早稲田大学教授。万葉調を近代化した独自の歌風を歌集『鹿鳴集』(一九四〇)で樹立。『会津八一全集』(一九五二)で読売文学賞を受賞。

古写真―戦前の高野山 〈高野山下名追氏所蔵〉

戦争前の写真と思われれます。当時の様子を伝えるものとしてご紹介いたします。

※写真中の人物については、何か情報がありましたら、霊宝館宛お寄せください。



高野山大学での軍事教練



霊宝館を訪れた将校



収蔵品の紹介 72

和歌山県指定文化財

山水図 (餐水喫霞図)

富岡鉄斎筆 紙本墨画

大正9年(1920) 霊宝館蔵

縦191.0cm 横81.0cm

入唐した弘法大師空海が終南山で修行中、尋ねてきた新羅道人に贈ったという詩が賛に記され、そのようすを描いた図です。画面右下、岩をくりぬいたトンネルの中に人物が二人見えます。岩に腰かける若い僧が弘法大師でしょうか、新羅道人と何か語らっているようです。そこから川を越えて道は続き、巨大な岩山に寄り添うように建つ寺院へと続いています。近世末期から近代にかけての時期を生きた「最後の文人画家」富岡鉄斎(一八三六〜一九二四)八十五歳の大作です。

賛によると「法龍大僧正猊下」のため描かれたようです。この人物は高野山金剛峯寺座主で霊宝館初代館長を務め、また南方熊楠と親交があったことでも知られる土宜法龍師(一八五四〜一九三三)を指します。

富岡鉄斎と高野山
 霊宝館放光閣の室内上部に掲げられた扁額は富岡鉄斎の揮毫によるものです。元となった書(開館九〇周年記念企画展にて展示)は高齢のためか代理人により寄贈されましたが、鉄斎は生涯に少なくとも二回(明治十年(一八七七)、同三十九年(一九〇六))は高野

山を訪れています。霊宝館には本図の他に絵画二幅や夫人と合作の茶碗などが奉納されています。また蓮華定院蔵応其上人像(江戸時代)の、大正十一年(一九二二)に新調した箱には鉄斎自筆の銘があり、鉄斎美術館(兵庫県)には鉄斎による応其上人像の粉本(写し)が伝わっています。

これらは晩年の鉄斎と高野山とのかかわりの深さをあらわし、その土台には土宜法龍初代館長との交流があるように思われます。

(F)

賛

吾住此山不記春
 空觀雲日不見人
 新羅道者幽尋
 意持錫飛來恰
 似神

南山中新羅道者見過
 七言一首 釋空海
 歲在庚申大正九年九月寄呈
 法龍大僧正猊下教正

鉄斎百鍊

連載

高野山の古建築
第二回 国宝金剛峯寺不動堂(一)

(財)和歌山県文化財センター 鳴海 祥博



正面の左隅



正面の右隅



背面の左隅



背面の右隅

高野山の象徴は何と云っても壇上伽藍の大塔です。その大塔の東側、一段下がったところに国宝金剛峯寺不動堂があります。

不動堂の本尊は、その名の通り重要文化財不動明王坐像で、脇侍の国宝八大童子像は大仏師運慶の作として有名です。この不動堂は、実は本尊や八大童子像と共に、明治四十一年に現在の場所に移築されてきたものです。それは貴重な仏像やお堂を保存するための措置でした。では、元々はどこにあったお堂なのでしょうか。

南海高野山駅からバスで山内へ向かうと、女人堂から、長い坂道を下って山内に入ってきます。坂の下に金輪塔という多宝塔の建つ小さな公園があって、道路脇に「心字池」という小さな池がひっそり残っています。この心字池を隔

てた北側、現在道路となっていた辺りに、ちょうど金輪塔と横並びに不動堂は建っていたのです。

この辺りは一心院谷と呼ばれています。それはかつて「一心院」というお寺があったからです。そして不動堂は一心院のお堂だったのです。

「一心院」は、建久九年(一一九八)に行勝上人という高僧が創立したお寺と伝えられています。

一心院はいつの時代にか姿を消してしまいましたが、その寺の本尊と八大童子像、そして不動堂だけが地域のお堂として守り伝えられてきたのです。

不動堂は変わった姿の建物です。そのことは古くから有名であつたらしく、江戸時代の案内記にも載せられています。それによると、不動堂は四人の大工が四隅からバラバ

ラに造ったので、建物の四隅がそれぞれ異なった形になった、と解説されています。

正面から見たとき、左右の隅は同じように見えますが、軒の長さなど寸法は確かに違って、四隅がすべて違った納まりとなっています。四人の大工が勝手気ままに造ったとはとても思えませんが、確かに不思議な形の建物です。

不思議な姿の不動堂には、ほかにも不思議なことがあります。それは本尊不動明王坐像と脇侍八大童子像の九体も像が一体どのように安置されていたのか、ということです。

不動堂には、漆塗りのすばらしい須弥壇がありますが、仏像はその壇上に安置されていたはずで、仏像は今は霊宝館に移され、かつての安置の様子は分かりません。今仮にこの壇上に本尊と八大童子像を並べようとすると、ぎゅうぎゅう詰めで、とても納まりそうにもないのです。なぜでしょう。この謎は次回、考えてみたいと思います。

高野山の文化

高野山金剛峯寺の発生と修験道

前高野山大学教授 日野西 眞定

(一) 高野山金剛峯寺の基本的な信仰の発展

前回の原稿で、「高野山の結界と女人禁制などのタブー」を取り上げ、これは日本独自のもので、弘法大師空海が、弘仁七年(八一六)に行われた、『性霊集』(巻第九)に「所有東西四維上下七里の中の一切の悪鬼神は、皆我が結界を出で去れ」(岩波文学大系本による)とある密教の結界とは異なるものである。日本の結界は、女人禁制・鳴物の禁止など、厳しいタブーを伴う独自のもので、柳田国男が『老女化石譚』で取り上げている、立山・白山等に存在している比丘尼石・美女桜等を生んでいるのである。

柳田国男は、日本民族が生んだこの風習を、農耕生活に入った時に求めている。これは恩師五来重先生も同一で

ある。時代的には、弥生式土器の時代に当たり、稲作農耕器具が作られたBC3世紀からAD3世紀までの期間に当たると考えられる。

私のみるところ、山岳霊場における、女人の入山・鳴物(音)・動物や魚の肉の持ち込みや食べること・動物の飼育などに対するタブーが、その主なものと思われる。しかし、動物の飼育は、各山で特に山の神の使として尊重されるもの一種類だけが定められ、大切に飼われた。

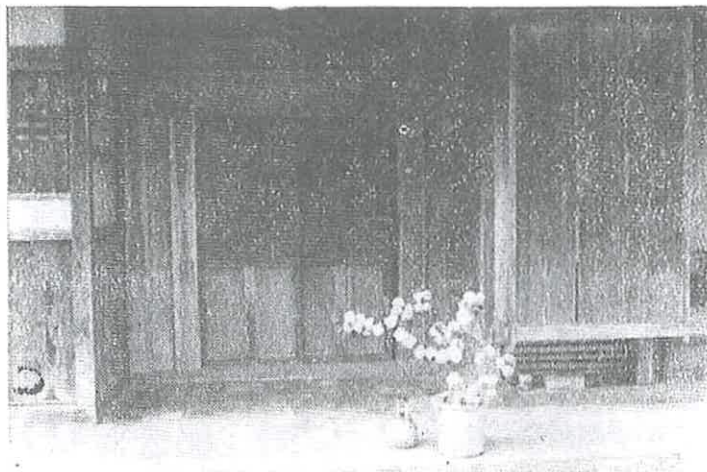
高野山では犬である。『金剛峯寺建立修行縁起』は、康保五年(九六八)に書かれたとされ、著者は不明であるが、古い高野山を知ることのできる貴重な存在である。同書によると、弘法

大師空海が、奈良県五條市犬飼山転法輪寺の存在する待乳峠まで来た時に、南山(この場合は高野山を指す)の犬飼と自称する大小黒犬を従えた一人の狩人に出会った。

この時、その狩人は、大師に対して、「我ハ是レ南山ノ犬飼ナリ。知ル所ノ山地萬許町、其ノ中ニ幽カナル平原有リ、靈瑞至テ多シ。和尚來臨シ住シ玉ヘ、自ラ助成セント。犬ヲ追ヒ放テ走ラセルノ間、即チ失セヌ。」と云ったとある。

高野山では、この犬は、大師を案内した「導き犬」と俗称されている。この犬に対する信仰については、『靈宝館だより』(第九十二号)に詳しく書いているので今回は触れない。ただここでは、弘法大師空海が、高野山金剛峯寺を開創するに当たり、待乳峠を重要視していることを指摘しておきた

い。この峠には奈良県五條市犬飼町に存在する犬飼山転法輪寺(高野山真言宗)がある。今は峠から降りて建立されているが、もとは「宇智郡待乳峠」(親王院蔵『四社明神私考』)の道脇に在った。この場所は、蓮金院秀伝の記した『丹生大明神儀軌』には、「両峯結縁ノ為メニ、先ツ葛城ニ入ル。」とある。両峯とは、大峯山と葛城山とを指し、修験道の兩大拠点の境に当たる重要な地である。しかし、大師は葛城山に勢力を持つ天野大社と結び、金剛峯寺を建立し、同寺が勢力を持つ様になると、同寺の入峯修行の場と為したのである。その時は、『高野雑日記』に記述されてある金剛峯寺年中行事の最も古い記録で、延久四年(一〇七二)に申し合せられている。この時代から、金剛峯寺は、寺としてまとまった動きが行えるようになったと考えられる。



参考写真：兵庫県但馬地域での花祭行事
 (竹野町下村、昭和42～44年頃、日野西撮影)
 旧暦4月8日、現在では5月8日に行う。その頃に咲いている赤と白の二色の花を
 組み、庭や門口に供える。

寺内には、学侶・行人・聖の三組織が
 存在するので、「教団」としてこの行
 事を行えるようになったと考えてもよ
 いと思う。

表にすると、次のようになる。

- 正月 修正三箇日 并ビニ白月黒月
 布薩
- 二月 彼岸七箇日 涅槃会 并ビニ
 布薩
- 三月 御影供 并ビニ布薩
- 四月 佛生会 安居初 并ビニ布薩
- 五月 花供 并ビニ布薩
- 六月 准胝悔過 并ビニ布薩
- 七月 安居終 盆供 并ビニ布薩

- 八月 彼岸七箇日 并ビニ布薩
- 九月 廿四日万燈会 并ビニ布薩
- 十月 布薩
- 十一月 布薩
- 十二月 十五日恵果御忌 并ビニ布
 薩

以上であるが、簡単に要点を列記す
 る。行事内容は、正応四年(一二九二)

の『金剛峯寺年中行事帳』によった。

(1)「花供」。定日なく躑躅の花の満開
 に行うとある。暦のなかった自然暦
 の時代の伝統が生かされている。法
 要は曼荼羅供を行っている。明治二
 十三年の一山成規改正まで行われ
 た。

(2)毎月、白月(一日)・黒月
 (十五日)の二度、布薩を行
 っている。僧侶が一堂に会し
 て、戒律の箇条を読み上げて
 罪を告白・懺悔するという、
 厳しい行法生活を行ってい
 る。

(3)四月に安居初めを行い、七
 月に安居の終わりをするとあ
 る。夏安居であるが、金剛峯
 寺のは、比叡山と同じく修験
 道系の花供が工夫され、櫛の
 木の葉、または小枝を壇場の
 諸堂や奥の院燈籠堂に供えて
 いる。その完成は、正応四年
 の金剛峯寺年中行事の完成ま

でかかったと考えられる。この時は、
 その充実にかかった時と考えられ
 る。(拙稿「高野山の霊所に供花す
 る夏安居」官家準編『山岳修験への
 招待』)

(4)全体の内容をまとめると、①花供、

- ②夏安居、③民俗信仰系(修正会・
 二月・八月)彼岸会・盆供)、④仏
 教(涅槃会・仏生会)、⑤密教及び
 弘法大師空海にかかわるもの(御影
 供(祥月命日)・花供・准胝悔
 過・万燈会(大師が始めた)・恵果
 御忌(大師の師匠)である。

以上であるが、この金剛峯寺の内容
 の充実にあたっては、清浄心院蔵『奥
 院勤行之事』に記述されている「御膳
 供」に関する藤原道長の参拝の記述が
 参考になる。同書は明治二十三年(一
 八九〇)の一山成規改正により、奥の
 院を含む全ての金剛峯寺の年中行事も
 現在の姿に改正されるが、それまでは
 同書しか存在していなかった。特に江
 戸時代には、奥の院は行人方支配とな
 り、それにより新しく記述されたと思
 えられることもあるが、貴重な存在で
 ある。私はこれを『密教文化(一一一
 号)』に史料紹介している。同書の成
 立は、江戸時代以前と考えられるが、
 現存のものは、その中に行事を担当し
 た行人方役職が挿入されている。江戸
 時代にも、同方がテキストに使用して

いるのである。
 その「御膳供」の項に、次の記述が
 ある。

毎日晨朝、日輪壇ニ於テ行事之レヲ
 供ス。昔ハ正位衆、之ヲ供養ス。治
 安三年ヨリ之ヲ献ズル所ナリ。(中
 略) 治安三年十月二十三日、法成寺
 殿下道長公御参拜ス。瑞徽有ルニ及
 ンデ、公大ニ随喜シテ、三間四面ノ
 礼堂ヲ始メテ造リ、庄園ヲ寄ス。
 とある。

この治安三年(一〇二三)の藤原道
 長の高野詣が、霊場高野山の名声を高
 めたのである。それまでの高野山金剛
 峯寺は、紀州の山中に存在する無名の
 霊場に過ぎなかった。それが、当時の
 第一の貴族である藤原道長が参詣する
 と、引き続き、白河・鳥羽各上皇の
 参詣、藤原北家の代々の参詣が行われ、
 有名な霊場への仲間入りが適えられ
 た。それとともに、これらの貴紳は、
 参詣毎に庄園の寄進を行ったために、
 経済的に豊かになることができた。こ
 うして、それから四十九年後には、年
 中行事を行うことができるまでに制度
 を充実することができたのである。こ
 れはさらに整備され、鎌倉時代になる
 と最も充実した正応四年の『金剛峯寺
 年中行事帳』を生むことができたので
 ある。

(次号へつづく)

Essay

新連載

高野山の光と影

高野山大学准教授 井上 ウイマラ



高野山大学に赴任した数年前、私は高野山を中心に歩き回りながら、「なぜお大師さんはこの地を修禪の地として選ばれたのだろうか？」と身体で考えた時期があった。ほぼ植林され尽くされた現在の高野山からは当時の自然が感じられなくて残念だった。しかし、大嶺の奥駆けを先達していただいたり、立里山周辺に残された自然林を歩いたり、野迫川の神秘的な雲海を眺めたり、天河神社

の来迎院に泊まらせていただいたりしているうちに私なりにお大師さんが愛でた高野山の姿が見つけられたような気がしてきた。大自然の中で、光と影とそその変化を体感しながら、いのちの息吹を見つめる場として、高野山は選ばれたのではないかと思う。



高野山で私が好きなスポットのひとつが伽藍の御社と西塔の間の空間だ。ある日の朝、山王院の回廊をぐるりと廻って御社の前に来ると、朝日が差し込んで社の金箔の扉にまぶしく反射していた。人生には、こうした一瞬にめぐり合う不思議な幸せがある。その同じ朝日の光が、御影堂の回廊に吊られた灯籠の陰を格子コントラストの妙。

こういう体験は、きっと私がお大師さんを捜し求めて歩いていることへのご褒美でありお返事なのではないかと思ってしまう。たとえそれが私の思い込みであったとしても、そうした思い込みを生きる力につなげてくれるのが聖地たる所以なのではないだろうか。

さて、この原稿を書いている最中、東日本大震災という未曾有の悲劇が起こってしまった。地震、津波、原発事故…。

亡くなられた方々のために深く哀悼の意を表しご冥福を祈ります。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。大切な人をなくされ、あるいは行方不明のまま自らに降りかかった被災状況を生きてゆくのはどんなに苦しいことでしょう。



三月十七日現在、福島原発事故の進展状況いかんでは今後の日本にかつて経験したことのない甚大な被害が予想される危機の中に私たちは置かれている。そんな朝、高野山は戻り寒波で一面の雪化粧。この寒さで原子炉を冷やしてほしい…。高野山上で千年以上続いてきた祈りがあり、今朝の祈りの中にはきつと今の私たちがおかれた苦境を何とか切り抜けることができるようにとの祈りがこもっているに違いない。

轆轤峠に向かういつもの坂道を登っていると、松の緑と積もった雪の白さの醸し出す妙なる美しさに目が惹かれた。「きつとお大師さんも祈りながら見守ってくださいっているに違いない！」そんな思いと共に目に涙がこみ上げてきた。

コラム

「神は細部に宿る」(God is in details) 第五章

今回は、深沙大將像と四天王広目天像の耳の形を比較し、それがよく似ているというお話でした。

これまでお話してきたイタリヤ人美術史家のモレルリは、細部を比較すれば作者判定が出来ると言っています。しかし、それは本当なのか？というお話をしましよ

う。日本には世界に誇るべき作家達がいいて、鞍作鳥、定朝、運慶、快慶といった人物が知られていますが、彼らは専門に仏像を造り、仏師と呼ばれていました。

仏師の場合、仏像の全てを一人で造ったとは限らないという点に気を付けなければなりません。仏師達は工房を構え、そこにはたくさん

くさんの人の手が入ります。奈良・東大寺南大門の仁王像も運慶や快慶達の共同制作です。

それと、仏像の細部を比較する場合に気を付けなければならぬのは、日本の仏像の造り方です。日本の仏像は、平安時代後期(十一世紀半ばから十二世紀頃)から寄木造が多くなり、以降ほとんどが寄木造になります。

寄木造になると、頭と胴体を別々に造ることが出来ます。つまり極端に言うと、頭と胴体を別々の人が造ることが出来るわけです。一体の仏像制作に多くの人が関わるのですから、耳の形が右と左で違うということもあるのです。

前回比較した四天王像も寄木造で、四体全てを快慶が一人で造ったわけではありません。弟子達と共同で造っているのです、やはり一体に差があります(下写真参照)。このような場合、一体の仏像で左右の耳の形が異なることもありますし、運慶作の国宝・八大

童子像も一体ずつ耳の形は違います。

このような事情があるので、耳の形は違っていたけれど、像に記されていた銘文や文献資料、像内から見付かった納入品から、作者は同じだったという例もあります。

となると、耳などの細部比較が絶対に正しいとは言えなくなり、ここに仏像にモレルリ法を用いる場合の弱点があるのです。

つまりは、耳の形が似ている時は、同じ作者だと言っても、似ていないからといって必ずしも違う作者だとは言えないということになります。

前回比較した深沙大將像の耳の形は、快慶作の広目天像とよく似ていました。その他にも、深沙大將像には彩色や技法など広目天像によく似た部分がたくさんあるので、個人的には快慶作の可能性が高いと思うのですが、皆さんはどう思われますか？

(I)



広目天像



持国天像



増長天像



多聞天像

広目天像が、快慶自らの作です。4体を比べると少しずつ表現が違うことが分かります。

霊宝館の庭園

ケヤキ・欒・つき・槻

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

ケヤキはニレ科の落葉広葉樹で大木や巨樹になり得る形質をもった樹種です。

高野山塊では山麓から山頂部にかけて自生していますが、大木・巨木・巨樹・老木は少なくなっています。

霊宝館の庭園林には開館当初から生えていたと思われる幹周り四・二五メートルの巨樹があります。

巨樹というのは地表から一・三メートルのところの幹周りが三メートル以上ある樹木です。

ケヤキという和名の由来は、古語の「けやけ・し」・きわだって目立つ、というのが通説。山野・里・街

にあつて四季折々、人目を引く木。人が腕を挙げて手を開き指を伸ばしたような枝振りの木ということによる欒の字が当てられています。

『紀伊植物誌』には、高野山の南麓の花園村ではケヤキについて、「村人は心が赤いものと青いものがあり、青いものは樹皮が美しく、上等なのは赤い方であるという」とあり、心は心材のことでしょう。手元の別の書き物には、老木の材は赤色をおびるので「血欒」とよび、中国では珍重される、と書かれています。

これら心材や材、樹皮の色の違いの他、材の比重・粘度・彫りや削りの難易など個性の強い樹種だぞ

うです。寺院堂塔建築の構造部主材としてそれまでのヒノキやコウヤマキに加えてケヤキが用いられたのは奈良時代末期といい、江戸時代に最盛期を迎え、壇上の西北隅の西塔は高野山では現存する唯一の欒造りの堂塔だと聞いています。

この木の古名は、つき・つく・つきのき、槻の字をあて、神がつき宿る木、神木とされているもの、聖域にあるものは斎槻（いつき・ゆつき）。強木・強くて長寿の木とされてきました。

強木といえば総本山金剛峯寺前の大欒は水分や養分の移動通路などの

最低限必要な組織を残して大幹は空洞になっています。それでいて、その季節が来れば若葉・青（緑）葉を茂らせ、大きな樹冠を支えて生きています。

『紀伊續風土記』では、往時は高野山の寺領であった、現在の海草郡紀美野町三尾川の井谷家の先祖が槻を伐つて高野山奥之院の玉垣料として奉納した。それ以来、奥之院の玉垣が新造された時には、その古木を当家に返し、村中の氏神社の玉垣料とした。という内容、日付が弘和二年（一三三二）閏正月二十三日という古文書のこと記載されています。



庭園内の巨樹の幹



壮年木の葉と幹



若葉が萌えはじめた梢